

## 宮崎県椎葉村大河内集落における植物の伝統的名称 およびその利用法Ⅳ. 草本植物

内海, 泰弘

九州大学大学院農学研究院環境農学部門森林環境科学講座森林生産制御学分野

安田, 悠子

九州大学大学院生物資源環境科学府環境農学専攻森林環境科学教育コース生産制御学研究室

椎葉, 康喜

九州大学農学部附属演習林

山内, 康平

九州大学農学部附属演習林

<https://doi.org/10.15017/1508417>

---

出版情報 : 九州大学農学部演習林報告. 96, pp.20-27, 2015-03-30. 九州大学農学部附属演習林  
バージョン :  
権利関係 :

## 宮崎県椎葉村大河内集落における植物の伝統的名称 およびその利用法Ⅳ．草本植物

内海泰弘<sup>\*1)</sup>・安田悠子<sup>2)</sup>・椎葉康喜<sup>3)</sup>・山内康平<sup>3)</sup>

伝統的な生活様式が維持されている宮崎県椎葉村大河内地区において、シダ植物 5 種、種子植物 64 種と 4 類を含む草本植物の伝統的な利用法を複数の年長者から聞き取り調査した。草本植物の用途として最も多かったのは食用であり、24 種が利用され、葉や若いシュートといった一般的な山菜としての活用だけでなく、4 種の根茎からデンプンを得ることで、貴重な食料源としていた。薬草として用いられていたのは 9 種あり、医薬品が十分でない環境で、様々な効能を見だし活用していた。逆に毒草として取り扱われていた種は 5 種存在した。資材となっていた種は 7 種あり、これらから屋根材、縄、蓑、草鞋など生活に不可欠な物資を得ていた。

キーワード：植物民俗誌、椎葉村、草本植物、方言、伝統の利用

The traditional usage of herbaceous plants including five fern plants, 64 species and four group of seed plants were studied by hearing investigation for the elder informants in Okawachi area in Shiiba Village, Miyazaki Prefecture. Twenty four species are utilized as food. These species utilized not only as an edible leaves and young shoots, but as starch source, which can be a principal diet. The starch was purified from the rhizomes in four species. Nine species are used as medicinal herbs with different efficacy in the living condition without medicinal products. Five species were treated as poisonous herb. Seven species supplied materials, such as roofing, rope, rain coat and straw sandals.

**Keyword:** Ethnic flora, Shiiba village, Herbaceous plant, Dialect, Traditional usage

### 1. はじめに

植物は人間の生存を支える基盤である。食料としての利用に加えて衣服や道具、家屋に至るまで、生活のあらゆる側面に植物が利用されてきた。この植物利用の様式には地域性が存在する。地域の環境条件と地史的背景の差異により植物相は地域ごとに固有なものとなる。同時に居住者の植物利用文化にも歴史があり、同じ植物でも地域それぞれの利用法が生まれ、維持されてきた。篠原 (1996) は地域的なまとまりを持つ社会集団が共有する民俗的知識として植物と人間の関係性を記載するものを植物民俗誌と定義している。これまで日本各地で植物民俗誌の構築を意図する様々な研究が行われてきたが (たとえば林 1967, 篠原 1973, 乙益 1978, 長澤 2001), 情報と物流の移動速度が飛躍的に高まった 21 世紀初頭において、地域固有の植物と人間の関係性は著しく低下し、植物民俗知を基盤とする社会は消滅の危機にある。

宮崎県東臼杵郡椎葉村を含む九州山地では、明治以降も焼畑農業を中心とした生活が営まれ (佐々木 1972), 1960 年代のエネルギー革命以前は焼畑農業が椎葉村での生活

の基盤であった (椎葉・内海 2010, 2011, 2014)。九州山地の焼畑農業では一時的な耕作地と周囲の将来の耕作候補地である森林が一体的に取り扱われており (椎葉・内海 2010), 耕作地を含む森林を中心として様々な植物利用の精緻な伝統的文化が維持されてきた (内海 2010)。2014 年現在でも椎葉村大河内地区では地域に生育する様々な植物の利用に精通した人々が生活しており、これまでに大河内地区における高木、低木、つる植物、タケ類についての植物民俗誌が報告されている (内海ら 2007, 2008, 2010)。本研究ではこれまで明らかにされていない草本植物の方言と伝統的な利用法について精査し、木本植物を中心とした既往の調査結果とあわせて大河内地区の植物民俗誌の全体像を示すことを目的とした。

### 2. 調査地の概要と調査方法

九州山地は九州の中部を北北東から南南西に走る九州の脊梁山地であり、この九州山地のほぼ中央部に位置し、熊本県の五家荘や宮崎県の米良荘と接するのが宮崎県椎葉村である。大河内地区はその南部を占め、標高 600m の地点

Utsumi, Y., Yasuda, Y., Shiiba, Y., Yamauchi, K., The traditional name and usage of plants in Okawachi area, Shiiba Village IV. Herbaceous plant  
\* 責任著者 (corresponding author) : E-mail: utsumi@forest.kyushu-u.ac.jp 〒 812-2415 福岡県糟屋郡篠栗町津波黒 394

<sup>1)</sup> 九州大学大学院農学研究院環境農学部門森林環境科学講座森林生産制御学分野

Laboratory of Forest Resource Management, Division of Forest Environmental Science, Department of Agro-environmental Sciences, Faculty of Agriculture, Kyushu University

<sup>2)</sup> 九州大学大学院生物資源環境科学府環境農学専攻森林環境科学教育コース生産制御学研究室

Laboratory of Forest Resource Management, Educational Course of Forest Science, Department of Agro-environmental Sciences, Graduate School of Bioresource and Bioenvironmental Sciences, Kyushu University

<sup>3)</sup> 九州大学農学部附属演習林福岡演習林

Kasuya Research Forest, School of Agriculture Kyushu University

における1944～2005年の年平均気温は13.3℃、暖かさの指数は103、年降水量は3472mmである(井上ら2006)。篠原(1996)は植物民俗と植生の関連から本州以南の地域で自然への依存の強いムラを暖かさの指数を主に用いて5つに分類し、寒冷な方よりブナ林のムラ、クリ林のムラ、ナラ林のムラ、カシ林のムラ、亜熱帯林のムラをそれぞれ定義している。大河内地区は標高に460mから1,607mまで大きな幅があり、この中にブナ林からカシ林までを含むことから、より温暖な琉球列島を中心とする亜熱帯林のムラ以外の多様な植物利用環境を持つムラといえる。大河内地区の民俗学的背景については内海ら(2007)および内海(2010)を参照されたい。

この大河内地区を調査対象区とし、大河内地区で生を受け、幼少期から当集落に居住されていた年長者の中で、植物名とその利用法に詳しい80歳から90歳までの10名の方をインフォーマントとした。2006年から2014年にかけて大河内地区に生育する草本植物の呼称とその利用法について各人に2から5回聞き取り調査を行った。得られたデータは当地区出身の椎葉と、当地区にそれぞれ6年および3年居住した内海と山内ならびに聞き取り調査に加わった安田で検討し、複数のインフォーマントから証言が得られた種を記載した。なお、学名と和名の表記は米倉・梶田(2003-)に従い、呼称と用途での種間の区別が認められず、まとめて扱われていた植物群は類名として記した。

### 3. 結果と考察

調査した草本植物68種と4類の学名、標準和名、大河内地区での呼称、用途等を表に示す。このうちシダ植物は5種、種子植物は63種と4類であった。

草本植物の用途として最も多かったのは食用である。野生種ではゼンマイ、ワラビ、アザミ類、イタドリ、イワタバコ、ウド、ウバユリ、オオバコ、オランダガラシ、カンゾウ類、コオニユリ、シオデ、スイバ、セリ、チガヤ、ツルボ、ノイバラ、ノビル、ヒガンバナ、フキ、ミツバ、ユキノシタ、ヨモギ、ワサビの24種を利用していた。

ゼンマイは展葉前のシュートを茹でて食用とする。胞子葉をオトコゼンマイ、栄養葉をオンナゼンマイと区別し、オンナゼンマイのほうを好んだ。栄養葉を食用としない場合も多いが(内藤1964; 橋本2007)、椎葉村では両者を食用とする(齊藤・椎葉1995)。ワラビは展葉前の栄養葉を採取し、ぬるま湯に木灰をいれてアク抜きをする。熱湯で茹でると柔らかくなりすぎて味が劣るといふ。以前は根を掘取って水でさらしてデンプンを得た。岐阜県飛騨地方ではワラビの地下茎から得るデンプンをわらび粉と称し、1970年代までは集落をあげて生産する地区もあった(長澤2001)。成長した茎は硬質で鋭く、引き抜こうとすると手が深く切れるため椎葉を含めた各地で忌避された(宇都宮1982)。

アザミ類は初島(1970)によるとノアザミとツクシアザミが大河内地区で記録されているが、大河内地区では葉の形状により食べられるか否かを判断しており、種として明

瞭な区別は行われていなかった。オオバコやカンゾウ類とともに、食糧が不足した時代に食された。チガヤは一般には甘みのある若い花穂が好まれるが(木村2005)、大河内地区では根をかじった。長野県でも小豆を煮る際の甘味料として根を用いた記録がある(長澤2001)。ウドやノビル、フキ、ミツバ、ヨモギ、ワサビは全国的に広く用いられている野草である。

イタドリは人気のある山菜で若い茎の皮をむいてそのまま食べても美味であり、炒め物にも用いる。同じタデ科のスイバも子供達に好まれたが、多食しないよう躰けられた。これは劇物に指定されているシュウ酸を多く含む(石井・滝山1990)ためだと考えられる。シオデも若いシュートを食用とし、他にノイバラ(*Rosa multiflora* Thunb.)やサルトリイバラ(*Smilax china* L.)の若いシュートも食べたという。このほかの種でも若いシュートであれば食べられたという証言もあり、人々が野生植物を食料という観点から試行錯誤しながら選択してきたことが伺える。

ウバユリは鱗茎をすりつぶし水でさらしてデンプンを得た。変種オオウバユリ(*Cardiocrinum cordatum* (Thunb.) Makino var. *glehnii* (F.Schmidt) H.Hara)を含むウバユリの小鱗茎は各地で利用されてきた(佐賀植物友の会2007; 乙益1978; 宇都宮1982)。アイヌの人々は旧暦5月を「どっさりウバユリを掘る月」と呼び(更科・更科1976)、掘取った鱗茎をつぶして水でさらしてデンプンを得た後、固めて乾燥し保存食とした(更科・更科1976; 福岡1995)。ウバユリにはオトコユリとオンナユリがあり花の咲かないオンナユリのみデンプンが得られ、オンナユリとオトコユリが同じ場所に入れ替わるとされた。同様の認識は本州やアイヌの人々にも見られる(宇都宮1982; 福岡1995)。この一見不可思議な現象はウバユリの生活史と関係する。ウバユリは1回結実型多年草で、開花結実による有性生殖に加えて、鱗茎の基部に小鱗茎を形成する栄養生殖を行う(Ohara et al. 2006)。開花個体(オトコユリ)は開花、結実に鱗茎の養分を消費して枯死するため鱗茎が得られず、その基部に栄養生殖で形成された小鱗茎が新たな個体(オンナユリ)として翌年成長するため(米倉私信)、同所的にオトコユリとオンナユリが入れ替わると解釈されているのであろう。

コオニユリの鱗茎からもデンプンが得られたが、そのまま焼いて食することがより好まれている。ヒガンバナの鱗茎はリコリンなど有毒なアルカロイドを含む(下堂園ら2012)ため、一般には食用に不適とされるが、食糧難の際には利用される場合があった。同じヒガンバナ科のキツネノカミソリ(*Lycoris sanguinea* Maxim. var. *sanguinea*)の鱗茎でも利用事例が報告されている(齊藤・椎葉1995)。ツルボはその鱗茎を水を張った鍋に入れて3～5日炊き続け、ペースト状になったものを食用とした。同様の調理法が鹿児島県でも報告され(内藤1964)、熊本県球磨郡でも食用とされていた(乙益1978)ことから、かつては南九州では一般的な食材だったと思われる。

伝統的に食用に栽培されてきた植物群については椎葉・

内海 (2011) で報告したが、そのなかでカブとダイコンは食用外の用途としてミツバチのために花が咲くまで放置することがあった。また、根が発達するニラは畑の畦や生け垣の土留めに用いられた。中央アメリカ原産で江戸時代に末期に渡来したベニバナインゲン (立石・星川 1997) も古くから栽培されてきた。なお椎葉・内海 (2011) では現地でもヒメと呼ばれている作物をヒメドコロ (*Dioscorea tenuipes* Franch. et Sav.) としたが、栽培試験の結果、カシウイモないしニガカシウであることが判明したため、ここに訂正する。鹿児島でもヒメと呼ばれる作物があり、内藤 (1964) は「多分ヒメドコロと思う」と記しているが、同様の過誤の可能性がある。種の同定には和名からの類推だけに頼らず、生育個体の精緻な観察が必要である。

家畜の飼料として用いられた種は7種あり、エノコログサ類とトダシバ、モロコシガヤ、ゲンゲはウシの餌、ノゲシとシロツメクサはウサギの餌、コハコベはニワトリの餌にそれぞれ適している。エノコログサについては乙益 (1978) が、ノゲシについては木村 (2005) が、コハコベについては内藤 (1964) と佐賀植物友の会 (2007)、乙益 (1978) がそれぞれ同様の言及をしている。

薬草としてはカンアオイ類、イワタバコ、キランソウ、ゲンノショウコ、センブリ、ドクダミ、ヘクソカズラ、ユキノシタ、ヨモギの9種が用いられてきた。このうち日本薬局方 (厚生労働省 2011) に登録されているのはカンアオイ類とゲンノショウコ、センブリ、ドクダミの4種である。大河内地区ではカンアオイ類の葉はあぶって皮膚に貼る外傷薬として用いられてきたが、木村 (2013) によるとカンアオイ属の根茎は鎮咳、鎮痛、去痰薬とされている。ゲンノショウコは葉を刻んでキランソウと併用する万病薬とされ、木島ら (1967) は腫れ物や皮膚病用または健胃薬とし、山路 (2013) では収斂薬、止瀉薬、整腸薬としている。センブリは根や茎、葉を煎じて健胃薬とし、同様の効果が広く認識されている (佐賀植物友の会 2007, 中西・邑田 2013)。ドクダミは干した葉を飲用するほか化膿止め用いられ、酒井 (2013) では利尿薬、解毒薬とされ、民間では一般に化膿、腫瘍、創傷に用いる (木島ら 1967)。

イワタバコは葉を乾燥させて万病薬とした。民間では健胃薬として知られている (木島ら 1967)。キランソウは葉を刻んでゲンノショウコと併用する万病薬とされ、中国では結膜炎、リンパ腺結核、梅毒に効ありとされる (木島ら 1967)。ヘクソカズラは葉を揉んで血止めに用いたが、寺林 (2013) は黄疸、下痢、消化不良に用いるとしている。ホウセンカは花の焼酎漬けを虫さされに用いたが、斉藤・椎葉 (1995) は水虫薬、伏見 (2013) は種子を有毒魚の解毒薬としている。ユキノシタは葉裏の表皮を取り除き、すりこぎで潰して風邪薬とした。木島ら (1967) は民間で凍傷、ひきつけに、芝野・草野 (2013) は腫れ物、火傷、冷傷の消炎薬としている。ヨモギは葉を揉んで外傷薬とし、高野 (2013) は腹痛、吐瀉、出血に用いるとする。

以上見てきたように多くの草本植物に様々な薬効が認識されているが、一般的な用途と一致する種としない種とが

存在する。たとえばセンブリの健胃薬としての認識は広く共通であるが、ヘクソカズラやカンアオイ類が止血に有効であるという認識は大河内地区のみに認められる。この一因は偽薬効果にあるのかもしれない。あるインフォーマントは出血した際に草本の種類にかかわらず3種の葉を混合して揉み、「アビラウンケンソワカ」と唱えれば血は止まると述べていた。同様の言及が岡山県旧二川村でも報告されている (篠原 1995)。現在はほとんど失われてしまったが、かつては様々なまじないが大河内地区には伝承されていたという。治癒すると強く思うことで、早期の回復につながった可能性があると考ええる。一方で、まだ効能が科学的に明らかにされていないものの、実際に薬効が期待できる植物も存在するかもしれない。ホウセンカの花のエタノール抽出物に虫さされに有効な成分が含まれていたり、ユキノシタの葉に解熱成分が含まれている可能性もある。近年伝統的な薬草の薬理効果を検証する研究が改めて脚光を浴びており (Graz et al. 2010)、このような一般的ではない事例の積み重ねから、新規有用成分が見いだされることもあり得るであろう。

毒草として認識されていた植物はイラクサ、ヨウシュヤマゴボウ、ウマノアシガタ、ヘビイチゴ、マムシグサの5種で、その中でヘビイチゴに実際には毒はない (橋本 2007)。イラクサのシュートにある刺毛に触れると痛痒がしばらく続く。刺毛に含まれる主成分はヒスタミンとシュウ酸、酒石酸であり、ラットによる試験ではシュウ酸と酒石酸で長期的な痛みを生じる (Fu et al. 2006)。ヨウシュヤマゴボウとウマノアシガタに特に用途はなく、マムシグサは便所のウジ殺しに用いた。有毒成分としてヨウシュヤマゴボウにはフィトラッカサポニン (磯田 2013)、ウマノアシガタにはアネモニン (杉山ら 1967)、マムシグサにはシュウ酸カルシウム (登田ら 2014) が含まれる。

このほか忌避されてきた植物にオヒシバとメヒシバ、ツユクサ、タケニグサ、チヂミザサ、ヌスビトハギの6種がある。オヒシバとメヒシバは常畑の雑草、ツユクサは焼畑の雑草のなかで特に除去に苦勞する種であった。開墾前の火入れ (椎葉・内海 2010) の有無によって優占する雑草が異なることは、火入れという人為攪乱が草本の種組成に強く影響することを示唆している。宇都宮 (1982) はツユクサについて、抜いて干しても雨露で生き返る、という証言を紹介しており、同様の苦勞が大河内の焼畑農業でも記録されている (椎葉・内海 2011)。人力に頼る伝統的農法にとって穀物の収量を左右する雑草の繁茂は死活問題であった。タケニグサの黄色の乳液は衣服につくと洗濯しても落ちにくく、チヂミザサとヌスビトハギの実は衣服に容易に付着するため嫌われた。

アサは茎から得られる繊維が強靱なため、背負い籠や腰につける籠 (いずれもテゴと呼称、椎葉・内海 2014) に用いたり、イノシシ用の罟の紐に用いられた。アサはまたその実を煎って食べた。カラムシの茎からも繊維が得られ、戦時中には兵隊の衣服用として供出した。なおカラムシの繊維は非常に細く繊細なため、これを用いた織物は越後上

布、宮古上布といった国の無形重要文化財に指定されている。カンスゲの葉からはテゴを作った。アケビ (*Akebia quinata* (Houtt.) Decne.) やツヅラフジ (*Sinomenium acutum* (Thunb.) Rehder et E.H.Wilson) といった木本性つる植物を原料としたテゴ (椎葉・内海 2013) は塑性が小さいため口元を縛りにくい、カンスゲ製のテゴは柔らかく口元を縛りやすい利点があった。ススキは茅葺き屋根の主材であり、集落毎にススキを生育する場所 (かや場) を決めて生産管理していた。チガヤの葉からは軸を取り除いて蓑を作ったり、茅葺き屋根のススキを縛る紐を編んだ。チガヤ製のミノは鹿児島でも作られていた (内藤 1964)。チカラシバは草鞋の補強材として一緒に編み込まれて使われていた。チカラシバ製の草鞋は佐賀県でも報告されている (佐賀植物友の会 2007) ほか、古い記録では 1785 年の青森で草鞋に使われ耐久性が高いとする記録がある (菅江 2000)。稲の作付けが困難であった山間部ではワラより入手しやすく耐久性の高いチカラシバが草鞋に広く用いられていた可能性がある。このほか、ウスアカカタバミの葉が真鍮楽器の研磨に用いられた。カタバミを真鍮楽器の研磨に有効であることが広く知られており (木島ら 1967; 木村 2005)、葉に含まれるシュウ酸 (Seal & Sen 1970; Libert & Franceschi 1987) が作用すると考えられる。

平安時代に渡来したホウセンカ (木村 2005) と同属で在来種のキツリフネはともに実をとばして遊び、マメヅタは葉をつぶしたときの音を楽しむ。内藤 (1964) は福岡県の民俗としてマメヅタの「葉をつまんで人の耳のとこころでぴちりと音がすると『今のは何の音か』と云って遊ぶ」と記録している。ツルボの茎は通直なため、集めてバツタ籠を編んだ。熊本県球磨地方では蛸籠になったという (乙益 1978)。カヤツリグサは茎を裂き広げて升の形を作って遊んだ。大河内地区でマスクサと呼ばれている所以である。身の回りにある植物を活用して遊び道具とした子供達の知恵が伺える。

大河内地区の主要な焼畑作物はヒエとアワ、アズキである (椎葉・内海 2011)。ヒエの播種は現地でヒエミズシと呼ばれるミズキ (*Cornus controversa* Hemsl. ex Prain) の開花期に、アワの播種はアワミズシと呼ばれるクマノミズキ (*Cornus macrophylla* Wall.) の開花時期にあわせて行われてきた (内海ら 2007)。このような生物季節を利用した播種はアズキとダイズでも行われ、ウツボグサの開花時期が両作物における播種の適期とされている。暦ではなく生物季節を基準に播種を行うことで、毎年気象変動の影響を最小限に抑える工夫がなされている。

お盆になるとアカマツ (*Pinus densiflora* Siebold et Zucc.) のコウソんでタイマツを焚いてショウロウサンをお迎えし (内海ら 2007)、墓にはシキミ (*Illicium anisatum* L.) の葉とオミナエシの花を供える。このオミナエシの花をボンバナと呼ぶが、日本各地で様々な花がボンバナと呼称されている。長野県ではオミナエシの他にキキョウやミソハギが報告されており (宇都宮 1982; 長澤 2001)、同じ椎葉村でもカノコユリを用いるところもある (斉藤・椎

葉 1995)。お供え物はチガヤまたはワラで作った輪の中に生米、キュウリ、時にはナスを入れ、カジノキの葉を敷物として仏壇に供え、明け方精霊流しに用いた。お供え物の敷物も日本各地でカシワやハス、フキ (内藤 1964; 宇都宮 1982; 長澤 2001) と様々である。米粉と麦粉を混ぜた団子をアカメガシワ (*Mallotus japonicus* (L.f.) Müll.Arg.) の葉でくるんだカシワダンゴもショウロウサンへあわせてお供えし、こちらは家人が食した。アカメガシワは葉が大きく柔らかいため、団子を包むのに適していたのであろう。アカメガシワの樹皮は日本薬局方 (厚生労働省 2011) に生薬として登録され、胃潰瘍の抑制に用いられることから (山路 2013)、健胃薬としての効果が期待されていた可能性もある。このほか、春の彼岸にはシキミと蓬餅を、秋の彼岸にはシキミと御萩、ヒガンバナをそれぞれ供えた。端午の節句にセキショウを風呂に入れ、中秋の月見ではススキの穂とトウモロコシ、サトイモなどの煮物を供えた。アズキは焼畑で、トウモロコシとサトイモは焼畑と常畑でよく作られていた作物であり (椎葉・内海 2011)、そのほかの植物も周辺に生育している種であった。篠原 (1995) は個々の環境の中での生活上の有用性が同じ植物を「同位素材」と表現している。類似した文化を持つ地域間では多くの同位素材があり、各地域ごとの入手しやすく使い勝手の良い種が同位素材として選択されてきたのであろう。一般的に広く行われる民俗行事の中にも地域の環境に応じた植物利用があり、それが地域文化に独自性を付与してきたと思われる。

表に掲げた方言には広域で使われるもの、周辺地域と同一ないし近似したもの、他の地域で認められないものが存在した。たとえばイワマツ (和名イワヒバ) やヤマユリ (同ウバユリ)、ボンバナ (同オミナエシ)、マスクサ (同カヤツリグサ)、ハナガラ (同ツユクサ)、キジンソウ (同ユキノシタ) などは全国的に使われているが (八坂書房 2011)、サド (同イタドリ)、シカ、ドゼン (同ウド) などは主に九州で認められる。トビシャコ (同ホウセンカ) やスミラ (同ツルボ) は九州南部で使われているが、パッチ (同マメヅタ) やダイドウバナ (ウツボグサ) の呼称は他地域で見つけることができなかった。倉田 (1969) は「方言名の多くは最近になって全く新たに名付けられたという物ではなく、長い歴史を持って里人達により数百年あるいはひょっとすると数千年も昔から伝えられてきたものである」と述べているが、西南戦争後に名付けられたと考えられる帰化植物のサイゴウグサ (同アレチノギク) のように方言によっては短期間で誕生し消滅していくものもあるのかもしれない。植物の種そのものが絶滅種から絶滅の懸念が低い種まで様々な段階に分かれているように、植物の方言にも消滅の危険度には様々な段階があると考えられる。方言が使われている地域が狭いほど消滅する可能性が高まるであろう。上で述べた例ではパッチやダイドウバナといった方言は、大河内地区での伝承が途絶えたときに消滅してしまうかもしれない。

均一化と効率化の圧力が大きい現代において、植物方言

表. 宮崎県椎葉村大河内地区における草本植物の方言と用途

学名	類名	和名	方言	用途等
<b>シダ植物</b>				
<i>Selaginella tamariscina</i> (P.Beauv.) Spring		イワヒバ	イワマツ	石垣などに観賞用として植える。
<i>Blechnum niponicum</i> (Kunze) Makino		シンガシラ	シンガシラ	
<i>Osmunda japonica</i> Thunb.		ゼンマイ	ゼンマイ	胞子葉をオトコゼンマイ、栄養葉をオンナゼンマイと区別していずれも食用とする。オンナゼンマイのほうが食べやすい。
<i>Lemmaphyllum microphyllum</i> C.Presl		マメツタ	パッチ	栄養葉を折り潰して音を出して遊ぶ。
<i>Pteridium aquilinum</i> (L.) Kuhn		ワラビ	ワラベ	若い茎を食用とする。ぬるいお湯に木灰をいれてアク抜きをする。熱湯でゆでると柔らかくなりすぎて味が劣る。火入れた林地に良く出る。地下茎からはデンプンを得る。牛に食べさせると膀胱炎になる。成長した茎は鋭く、抜こうとすると手が切れる。
<b>種子植物</b>				
<i>Cannabis sativa</i> L.		アサ	アサ	ダイコンを収穫した後の常畑に播種した。茎から繊維をとり、これを木灰の入った水(アクミズ)でゆでた後、川でさらした。縄を編んだ後、柿渋(シユブ)を用いて耐久性を高めた。イノシシの首にかけて捕獲する罠(シンワナ)の材料や、テゴのひもに用い、魔除けとして神棚に飾ることもあった。実は食用とし、煎ると香ばしくて美味であった。
<i>Cirsium</i> spp.	アザミ類	ノアザミ, ツクシアザミ	アザミ, イノシリスン	終戦後にトゲの少ない若葉を食用とした。
<i>Erigeron bonariensis</i> L.		アレチノギク	サイゴウグサ	西南戦争(1877年)の後に見かけるようになった。
<i>Fallopia japonica</i> (Houtt.) Ronse Decr. var. <i>japonica</i>		イタドリ	サド	若い茎の鬼皮(表皮)をむき塩をつけて生食すると美味。炒めても食べる。
<i>Persicaria longiseta</i> (Brujin) Kitag.		イヌタデ	インタデ	花にミツバチがよく訪れる。
<i>Urtica thunbergiana</i> Siebold et Zucc.		イラクサ	イラ	シュートの刺毛にふれると長時間痛痒が持続する。
<i>Conandron ramondioides</i> Siebold et Zucc.		イワタバコ	イワチシャ	葉を天ぷらなどで食用とする。陰干しした葉を万能薬として飲用する。
<i>Oxalis comiculata</i> L. f. <i>atropurpurea</i> (Planch.) Van Houtte ex Hegi		ウスアカカタバミ	コガネグサ	葉を真鍮楽器の研磨に用いた。
<i>Prunella vulgaris</i> L. subsp. <i>asiatica</i> (Nakai) H.Hara		ウツボグサ	ダイドウバナ	開花期(5月末頃~6月頭)に小豆と大豆を蒔く。開花前に播種するとつるばかり伸びる。本種が多い土地に大豆を蒔くと良くできる。
<i>Aralia cordata</i> Thunb.		ウド	シカ, ドゼン	若芽を焼いて皮をむいて味噌をつけて食べるのが一番美味。
<i>Cardiocrinum cordatum</i> (Thunb.) Makino		ウバユリ	ヤマユリ	鱗茎をすりつぶし、水でさらしてデンプンを得る。男と女が入れ替わり、オトコユリからは鱗茎が得られない。
<i>Ranunculus japonicus</i> Thunb.		ウマノアシガタ	ウシミツバ, ウシゼリ	牛には食べさせない。
<i>Setaria</i> spp.	エノコログサ類	アキノエノコログサ, キンエノコロ, コツブキンエノコロ	エノコボ	牛の餌にする。
<i>Plantago asiatica</i> L.		オオバコ	オンバク	若葉を食用とする。
<i>Eleusine indica</i> (L.) Gaertn.		オヒシバ	ホトクリ	夏に繁殖する常畑の雑草。繁殖力が強くて除草に苦慮する。
<i>Patrinia scabiosifolia</i> Fisch. ex Trevir.		オミナエシ	ボンバナ	盆にシキミとともに墓に供える。
<i>Nasturtium officinale</i> R.Br.		オランダガラシ	カワダカナ	葉を食用とする。
<i>Dioscorea bulbifera</i> L. f. <i>domestica</i> (Makino) Makino et Nemoto		カシュウイモ	ヒメ	担根体を食用とする。産後の肥立ちによい。それほどおいしくない。
<i>Eragrostis ferruginea</i> (Thunb.) P.Beauv.		カゼクサ	ミチクサ	子カラシバと異なり、わらじには編み込まない。
<i>Brassica rapa</i> L. var. <i>rapa</i>		カブ	ナノハナ	葉と新芽、胚軸、根を食用とする。一部の株はミツバチ用に残し、結実後は田畑に梳き込む。
<i>Cyperus microiria</i> Steud.		カヤツリグサ	マスクサ	茎を裂いて升のような四角を作って遊んだ。
<i>Boehmeria nivea</i> (L.) Gaudich. var. <i>concolor</i> Makino f. <i>niponanivea</i> (Koidz.) Kitam. ex H.Ohba		カラムシ	カラオ	茎から繊維をとるために栽培し、戦時中は兵隊の衣服用に供出した。
<i>Asarum</i> spp.	カンアオイ類	クロフネサイシン, マルミカンアオイ	サイシン	葉をあぶって怪我をした部位に貼った。
<i>Carex morrowii</i> Boott		カンスゲ	スゲ	秋に伸びる柔らかい葉を使って縄を編み、この縄でテゴを編んだ。柔らかいので弁当を入れる手かご(テゴ)に用いた。アケビのテゴと違い、口を閉じることができるとで重宝した。
<i>Hemerocallis</i> spp.	カンゾウ類		スッパッパー	葉が出たばかりのころ、ゆでて酔味噌であえて食べる。
<i>Impatiens noli-tangere</i> L.		キツリフネ	トビシャゴ	触れると実がはじける。
<i>Ajuga decumbens</i> Thunb.		キラソウ	イシャゴロシ	ゲンショウコとともに刻んで乾燥させ、煎じて万病薬とした。
<i>Astragalus sinicus</i> L.		ゲンゲ	レンゲ	牛の飼料や水田の土質改良に用いた。

学名	類名	和名	方言	用途等
<i>Lilium leichtlinii</i> Hook.f. f. <i>pseudotigrinum</i> (Carrière) H.Hara et Kitam		コオニユリ	コメユリ	鱗茎からデンプンを採取したが、そのまま焼いて食べても美味。花は観賞用。
<i>Stellaria media</i> (L.) Vill.		コハコベ	ハコベ	ニワトリの餌とした。
<i>Calanthe tricarinata</i> Lindl.		サルメンエビネ	エビネ	宮崎演習林内の銅山跡にあった。
<i>Smilax riparia</i> A.DC.		シオデ	シオデ	若いシュートを食用とする。
<i>Cymbidium goeringii</i> (Rchb.f.) Rchb.f.		シュンラン	ハクリ	
<i>Trifolium repens</i> L.		シロツメクサ	エンバク	ウサギの餌とした。
<i>Rumex acetosa</i> L.		スイバ	シイフキ	茎の皮をむいて塩をつけて生で食べる。草を揉んで手を洗うと、汚れがよく取れた。食べ過ぎると体に悪いと親に言われたが、空腹時にはよく食べた。
<i>Miscanthus sinensis</i> Andersson		ススキ	カヤ	集落毎にカヤ場を管理し、住民総出で各家の屋根を葺いた。種が落ちた後の穂を束にして屋内用のホウキを作った。戦時中は穂を枕に利用した。
<i>Acorus gramineus</i> Sol. ex Aiton		セキショウ	ショウブ	端午の節句に風呂に入れる。
<i>Oenanthe javanica</i> (Blume) DC.		セリ	ホンゼリ・セリ	葉を食用とする。
<i>Swertia japonica</i> (Schult.) Makino		センブリ	センブリ	陰干した全草を煎じて健胃薬とした。
<i>Raphanus sativus</i> L.		ダイコン	ナノハナ	葉と新芽、胚軸、根を食用とする。一部の株はミツバチ用に残し、結実後は田畑に梳き込む。
<i>Macleaya cordata</i> (Willd.) R.Br.		タケニグサ	タテバコ	茎や葉を傷つけた際に出る黄色い汁が衣服にふれると取れず難儀する。
<i>Imperata cylindrica</i> (L.) Raeusch. var. <i>koenigii</i> (Retz.) Pilg.		チガヤ	マカヤ	根をかじった。葉から軸を取り除いて糞を作った。茅葺き屋根の普請の際、主材のススキを縛る紐として編んだ。盆にカジノキの葉の上にチガヤで輪を作り、その中に生米、キュウリ、場合によってナスを入れてお供え物として、精霊流しに用いた。
<i>Pennisetum alopecuroides</i> (L.) Spreng.		チカラシバ	ミチクサ	わらじを編む際にワラに編み込んで強度を高めた。
<i>Oplismenus undulatifolius</i> (Ard.) Roem. et Schult.		チヂミザサ	タコウラボトクリ	実(ザシ)に粘性があり、衣服に附着して難儀した。
<i>Commelina communis</i> L.		ツユクサ	ハナガラ	焼き畑の雑草。繁殖力が強く除草が大変だった。
<i>Barnardia japonica</i> (Thunb.) Schult. et Schult.f.		ツルボ	スミラ	鱗茎だけを丁寧に取り分け、3~5日間とる火で煮て食用とした。トウモロコシや麦の粉をかけて食べると美味。茎を編んでバツタ(ギメ)用の虫かごにした。
<i>Houttuynia cordata</i> Thunb.		ドクダミ	ドクダミ	葉を乾燥させて煎じて飲用した。化膿止めになった。
<i>Arundinella hirta</i> (Thunb.) Tanaka		トダシバ	コクサ	牛の餌に用いた。
<i>Allium tuberosum</i> Rottler ex Spreng.		ニラ	ニラ	葉を食用とする。根が発達するので石垣や畑の土留めに用いる。
<i>Hylodesmum podocarpum</i> (DC.) H.Ohashi & R.R.Mill subsp. <i>oxyphyllum</i> (DC.) H.Ohashi & R.R.Mill		ヌスビトハギ	ザシ	種子が衣服に附着して難儀した。
<i>Spiranthes sinensis</i> (Pers.) Ames		ネジバナ	ヒダリマキ	花序の形から方言がついた。
<i>Sonchus oleraceus</i> L.		ノゲシ	チゴナ	ウサギの最良の餌である。
<i>Allium macrostemon</i> Bunge		ノビル	ノビル	鱗茎と葉を食用とする。
<i>Lycoris radiata</i> (L'Hér.) Herb.		ヒガンバナ	ヒガンバナ	鱗茎を食べた人もいた。
<i>Petasites japonicus</i> (Siebold et Zucc.) Maxim.		フキ	フキ	ふきのとうと茎を食用とする。
<i>Paederia foetida</i> L.		ヘクソカズラ	ヘクソカズラ	葉を揉んで血止めに用いた。
<i>Phaseolus coccineus</i> L.		ベニバナインゲン	ハナメ	実を食用とする。
<i>Potentilla hebiichigo</i> Yonek. et H.Ohashi		ヘビイチゴ	ヘビイチゴ	毒なので食べない。
<i>Impatiens balsamina</i> L.		ホウセンカ	トビシャゴ	花を焼酎に漬けて塗布すると虫さされに効いた。触れると実がはぜる。
<i>Arisaema japonicum</i> Blume		マムシグサ	ヘビゴンニヤク	便所のウジ殺しに用いた。
<i>Cryptotaenia canadensis</i> (L.) DC. subsp. <i>japonica</i> (Hassk.) Hand.-Mazz.		ミツバ	ミツバ/ミツバゼリ	ゆでてゴマ醤油で食べると美味。
<i>Digitaria ciliaris</i> (Retz.) Koeler		メヒシバ	ホトクリ	秋に繁茂する常畑の雑草。繁殖力が強く除草が大変だった。
<i>Sorghum nitidum</i> (Vahl) Pers.		モロコシガヤ	カルカヤ	ウシの餌とする。
<i>Saxifraga stolonifera</i> Curtis		ユキノシタ	キジンソウ	葉裏の薄い紫色の皮を取り除き、すりこぎで潰して風邪薬にした。
<i>Phytolacca americana</i> L.		ヨウシュヤマゴボウ	ヤマゴボウ	食用としない。
<i>Artemisia indica</i> Willd. var. <i>maximowiczii</i> (Nakai) H.Hara		ヨモギ	フツ	葉を食用にする。揉んで傷口に塗布した。
<i>Eutrema japonicum</i> (Miq.) Koidz.		ワサビ	ワサビ	形態に違いはないが水が無いと成育しないサワワサビと水が無くても成育可能なリクワサビがある。

と植物の伝統的利用法を地域の文化として保全するためには、個々の方言や利用法を記録することが必要であろう。本小論および既報の高木（内海ら2007）、低木（内海ら2008）、つる植物と竹類（内海ら2010）をあわせると、大河内地区には200種を超える植物に方言が存在し、生活に利用されてきたことが明らかになった。しかし、伝統的な生活様式が世代ごとに弱まっていく現状では、これらの記録が過去の遺物となる可能性はある。一方で、環境負荷を軽減させるために国外や地域外の資源利用を控え、地域内の資源を重要視する生活様式を人々が選択するときに、受け継がれてきた固有の民俗知が意味を持ちうるかもしれない。どの地域においても、居住する人々がエネルギー革命以前の伝統的生活に戻ることは考えにくい、周囲の環境に適応しながら精緻な生活体系を構築してきた過去の民俗知を理解することで、地域に生活する意味を深化させることは可能であろう。本小論がその一部を成す椎葉村大河内の植物民俗誌が地域の伝統文化継承の一助になることを期待する。

### 謝 辞

調査に際し椎葉重行、久子夫妻、椎葉司、君代夫妻、椎葉治美、松子夫妻、浜砂忠氏、藤岡盛重氏、椎葉朗氏、中竹和蔵氏に草本植物の伝統的な利用法について多大なご教示、ご示唆をいただいた。また東北大学の米倉浩司博士にウバユリの生活史についてご説明いただいた。以上の各氏に心より御礼申し上げます。本研究はJSPS 科研費2358023の助成を受けた。

### 引用文献

- Fu HY, Chen SJ, Chen RF, Ding WH, Kuo-Huang LL, Huang RN (2006) Identification of oxalic acid and tartaric acid as major persistent pain-inducing toxins in the stinging hairs of the nettle, *Urtica thunbergiana*. *Annals of Botany* 98: 57-65
- 伏見裕利 (2013) ムクロジ目. (薬用植物学改訂第7版. 水野端夫, 木村孟淳, 田中俊弘, 酒井英二, 山路誠一編, 南江堂, 東京) 183-189
- 福岡イト子 (1995) アイヌ植物誌. 草風館, 東京
- Graz B, Willcox ML, Diakite C, Falquet J, Dackuo F, Sidibe O, Giani S, Diallo D (2010) Argemone mexicana decoction versus artesunate-amodiaquine for the management of malaria in Mali: policy and public-health implications. *Transaction of the Royal Society of Tropical Medicine and Hygiene* 104: 33-41
- 橋本郁三 (2007) 食べられる野生植物大事典 - 草本・木本・シダ. 柏書房, 東京
- 初島住彦 (1970) 宮崎演習林の植物. 九州大学農学部演習林報告 44: 1-174
- 林善茂 (1967) アイヌの食料植物採集. 北方文化研究 2: 157-172
- 井上 晋・熊谷朝臣・内海泰弘・馬淵哲也 (2006) 九州大学

- 農学部附属演習林宮崎演習林第6次森林管理計画書. (宮崎演習林第6次森林管理計画策定委員会編), 九州大学農学部附属宮崎演習林, 椎葉
- 石井裕子・滝山一善 (1990) 植物中のシュウ酸カルシウム結晶の形態と結晶水. *分析化学* 39: 145-149
- 磯田進 (2013) アカザ目. (薬用植物学改訂第7版. 水野端夫, 木村孟淳, 田中俊弘, 酒井英二, 山路誠一編, 南江堂, 東京) 121-125
- 木村孟淳 (2013) ウマノズクサ目. (薬用植物学改訂第7版. 水野端夫, 木村孟淳, 田中俊弘, 酒井英二, 山路誠一編, 南江堂, 東京) 144-145
- 木村陽二郎 (2005) 図説花と樹の事典. (植物文化研究会編), 柏書房, 東京
- 木島正夫・柴田承二・下村孟・東丈夫 (1967) 廣川薬用植物大事典. 廣川書店, 東京
- 厚生労働省 (2011) 第十六改正日本薬局方.
- 倉田悟 (1969) 植物と民俗. 地球出版, 東京
- Libert B, Franceschi, VR (1987) Oxalate in crop plants. *J. Agric. Food Chem.* 35: 926-938
- 長澤武 (2001) 植物民俗. 法政大学出版局, 東京
- 内藤喬 (1964) 鹿児島民俗植物記. 鹿児島民俗植物記刊行会, 鹿児島
- 中西勤・邑田裕子 (2013) リンドウ目. (薬用植物学改訂第7版. 水野端夫, 木村孟淳, 田中俊弘, 酒井英二, 山路誠一編, 南江堂, 東京) 219-228
- Ohara M, Narumi T, Yoshizane T, Okayasu T, Masuda J, Kawano S (2006) Life-history monographs of Japanese plants. 7: *Cardiocrinum cordatum* (Thunb.) Makino (Liliaceae). *Plant Species Biology* 21: 201-207
- 乙益正隆 (1978) 球磨の植物民俗誌. 地球社, 東京
- 酒井英二 (2013) コショウ目. (薬用植物学改訂第7版. 水野端夫, 木村孟淳, 田中俊弘, 酒井英二, 山路誠一編, 南江堂, 東京) 142-144
- 佐々木高明 (1972) 日本の焼畑. 古今書院, 東京
- 佐賀植物友の会 (2007) 佐賀の植物方言と民俗 - 増補改訂版 -. 佐賀植物友の会, 佐賀
- 斉藤政美・椎葉クニ子 (1995) おばあさんの植物図鑑. 葦書房, 福岡
- 更科源蔵・更科光 (1976) コタン生物記. 法政大学出版局, 東京
- Seal, SN, Sen, SP (1970) The photosynthetic production of oxalic acid in *Oxalis corniculata* *Plant Cell Physiol* 11: 119-128
- 芝野真喜雄・草野源次郎 (2013) バラ目. (薬用植物学改訂第7版. 水野端夫, 木村孟淳, 田中俊弘, 酒井英二, 山路誠一編, 南江堂, 東京) 153-168
- 下堂蘭栄子・岩屋あまね・榎元清美・福司山郁恵・吉村浩三 (2012) ヒガンバナ科植物のリコリン及びガラクタミン分析. 鹿児島県環境保健センター所報 13: 80-83
- 菅江真澄 (2000) 菅江真澄遊覧記. 内田武志, 宮本常一訳. 平凡社, 東京



- 杉山登・片岡寛・山田和俊 (1967) プロトアネモニンの光化学的二量化反応によるアネモニンの合成. 有機合成化学 25: 582-586
- 椎葉康喜・内海泰弘 (2010) 宮崎県椎葉村大河内集落における焼畑農業. 九州大学農学部演習林報告 91: 34-39
- 椎葉康喜・内海泰弘 (2011) 宮崎県椎葉村大河内地区における焼畑作物. 九州大学農学部演習林報告 92: 24-32
- 椎葉康喜・内海泰弘 (2014) 宮崎県椎葉村大河内地区の焼畑民具. 九州大学演習林報告 95: 21-34
- 篠原徹 (1973) Ethnobotany からみた山村生活. 岡山理科大学紀要 9: 45-67
- 篠原徹 (1995) 海と山の民俗自然誌. 吉川弘文館, 東京
- 篠原徹 (1996) 植生と民俗. (環境の民俗. 野本寛一・福田アジオ編, 雄山閣, 東京) 267-285
- 立石康一・星川清親 (1997) インゲンマメ. (朝日百科植物の世界. 八尋洲東編, 朝日新聞社, 東京) 282-284
- 高野昭人 (2013) マツムシソウ目. (薬用植物学改訂第7版. 水野端夫, 木村孟淳, 田中俊弘, 酒井英二, 山路誠一編, 南江堂, 東京) 244-258
- 寺林進 (2013) シソ目. (薬用植物学改訂第7版. 水野端夫, 木村孟淳, 田中俊弘, 酒井英二, 山路誠一編, 南江堂, 東京) 228-248
- 登田美桜・畝山智香子・春日文子 (2014) 過去 50 年間のわが国の高等植物による食中毒事例の傾向. 食品衛生学雑誌 55: 55-63
- 内海泰弘・村田育恵・椎葉康喜・井上晋 (2007) 宮崎県椎葉村大河内集落における植物の伝統的名称およびその利用法 I. 高木. 九州大学農学部演習林報告 88: 45-56
- 内海泰弘・村田育恵・椎葉康喜・井上晋 (2008) 宮崎県椎葉村大河内集落における植物の伝統的名称およびその利用法 II. 低木. 九州大学農学部演習林報告 89: 51-62
- 内海泰弘・村田育恵・椎葉康喜・宮島裕子・井上晋 (2010) 宮崎県椎葉村大河内集落における植物の伝統的名称およびその利用法 III. つる, 竹. 九州大学農学部演習林報告 91: 15-18
- 内海泰弘 (2010) 九州山地の植物利用 - 椎葉村の植物誌. 池谷和信編. 日本列島の野生生物と人. 世界思想社. 104-124
- 宇都宮貞子 (1982) 植物と民俗, 岩崎美術社, 東京
- 山路誠一 (2013) フウロウソウ目. (薬用植物学改訂第7版. 水野端夫, 木村孟淳, 田中俊弘, 酒井英二, 山路誠一編, 南江堂, 東京) 168-174
- 八坂書房 (2001) 日本植物方言集成. 八坂書房, 東京
- 米倉浩司・梶田忠 (2003-) 「BG Plants 和名-学名インデックス」(YList), [http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist\\_main.html](http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist_main.html) (2014 年 10 月 10 日)

(2014 年 10 月 31 日受付: 2014 年 12 月 16 日受理)